

純粹経験から行為的直観へ — 技術が問われるところ

秋富克哉（京都工芸繊維大学）

西田幾多郎は、『善の研究』（1911）から二十数年を経た時、自らの歩みを振り返って、『善の研究』以来、私の目的は、何処までも直接的な、最も根本的な立場から物を見、物を考えようというにあった。すべてがそこからそこへという立場を把握するにあった」（『哲学論文集 第三』序）と述べている。「そこからそこへ」の「そこ」は、主客未分の「純粹経験」に始まり、やがて「自覚（絶対自由の意志）」から「場所」、さらに「弁証法的一般者」から「行為的直観」あるいは「ポイエシス」へと移って行った。

西田において技術を問うことは、他の主題同様、この「そこ」を離れず、「そこ」から問うことを意味した。しかし、それは、西田にとって技術が数ある主題のなかの一つであったことを意味するのではない。むしろ技術という主題こそは、この「そこ」に独自の仕方に関わり、西田の思索の展開を規定していくように思われる。ここにこそ西田の思索の特性が、そしてまた何よりも技術という主題の特性が、現われている。

西田において「技術」が明確に主題化するのには1930年代以降のことである。しかし、上の言葉が示すように、西田にとって『善の研究』からの出発は、どこまでも決定的であった。この書には、目立たないながら、第1編「純粹経験」第4章「知的直観」のなかに、「真の知的直観とは純粹経験における統一作用其者である、生命の捕捉である、即ち技術の骨の如き者、一層深く云えば美術の精神の如き者がそれである」という表現が登場する。もちろん、このような規定だけでは、われわれが今日技術のもとに理解するような事態の全体に立ち向かうことはとうていできない。しかし他方、この言葉は、制作実践の知としての技術にとって根本的直覚が本質的であり、したがって主客合一の最も深い実現が技術に見出せることを示している。そしてここに、私たちが技術を基本的なところから考えようとする際に押えておかなければならないことがあると思われる。事実、西田の思索がさらに展開し、技術が世界と自己の相互的な形成作用のなかに位置づけられるようになっても、主客合一的に物を作るという事態を離れないところに、西田の一貫した基本的洞察があり、それが西田の技術理解の独自性となっている。しかし他方、この独自性は、われわれが技術の問題を西田の立場に学びつつさらに展開させようとする時、ある種の制約にもなるのではないか。

本提題では、『善の研究』における言及から出発して「場所」までの展開を踏まえるとともに、そこから1930年代の技術の主題化を「行為的直観」、「ポイエシス」、「作られたものから作るものへ」等の術語のもとに取り出すことで、西田の技術理解の内実を明らかにし、併せてその可能性と問題性を考察してみたい。